

**論文紹介** Haruo Kubozono, Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese, *Lingua* 120: 2323-2335 (2010)

著者	窪園 晴夫
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
号	6
ページ	51-54
発行年	2011-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000687">http://doi.org/10.15084/00000687</a>

〈論文紹介〉

Haruo Kubozono

Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese

*Lingua* 120: 2323–2335 (2010)

窪蘭 晴夫

国立国語研究所 理論・構造研究系 教授

この論文はFAやPTAのような「アルファベット頭文字語」(以下、ア頭文字語)について、方言間に見られるアクセントの異同を統一的に説明しようとしたものである。日本語のアクセントはこれまで詳しく論じられてきたが、ア頭文字語のアクセントについては研究が少なく、また方言間の異同を統一的に説明しようという試みは皆無であった。本論文はこの研究の間隙を埋めることによって、日本語のアクセント研究、とりわけ借用語のアクセント研究を発展させようとするものである。

他の種類の語彙と同じように、日本語の方言はア頭文字語のアクセントについても表面上大きなバリエーションを示す([はピッチの上昇位置を、]は下降位置を示す)。

	FA	SF	PTA
東京方言	エ[フエ]ー	エ[スエフ	ピ[ーティーエ]ー
近畿方言	[エフエ]ー	エスエ[フ	[ピーティーエ]ー
鹿児島方言	エ[フ]エー	エス[エ]フ	ピーティー[エー
甌島方言	[エ]フ[エ]ー	[エ]ス[エ]フ	[ピー]ティー[エ]ー

これらのアクセント型がどのような規則によって導き出されるものか、方言ごとに見ていくには結論がでにくい。たとえば東京方言の場合、ア頭文字語の多くは最終要素の初頭音節にアクセント(核)が置かれる(エフエ<sup>↑</sup>ー、ピーティーエ<sup>↑</sup>ー)が、外来語アクセント規則であればエフ<sup>↑</sup>エー、ピーティ<sup>↑</sup>ーエーとなるはずであるし、またロープ<sup>↑</sup>ウェー、パトロール<sup>↑</sup>カーのような複合名詞アクセントとも幾分異なるように見える(Kubozono 2003)。その一方で、(東京方言の)電話番号を発音するときの数字列アクセントを決める規則にも似ている点があり、英語のア頭文字語のアクセントを単純に模倣したようにも見える。アクセントの事実の一つであるが、同じ事実に対して複数の解釈が存在し、いずれも完璧な説明とは言えないように見えるのである。これに対し、甌島方言(鹿児島県)のアクセント型は、この方言の複数のアクセント規則(外来語アクセント規則、複合名詞アクセント規則)で説明でき、どのアクセント規則かを特定することはむずかしい。このように、一つの方言だけ分析してはどのような規則が働いているのかははっきり見えてこないのである。

もちろん日本語の諸方言がすべて同じアクセント規則でア頭文字語を処理しているという

保証はどこにもないのであるが、方言によって依拠するアクセント規則が異なるという仮定もただちには受け入れがたい。

この問題に解決の糸口を提供してくれるのが鹿児島方言である。この方言ではアルファベットの単独発音に二つのアクセント型が観察され、FやWのように2音節以上の長さを持つものはいわゆるA型（語末から二つ目の音節が高くなる型）、AやPのように1音節の長さのアルファベットは基本的にB型（語末音節が高くなる型）で発音される。面白いことに、ア頭文字語のアクセントは語頭要素のアクセント型をそのまま継承する。たとえばFBIやWCはFやWのアクセント型を継承してA型アクセントで発音され、一方ATMやPTAはAやPのアクセント型を継承してB型アクセントで発音される。

A型：[エ]フ， エフ[ビー]アイ；ダ[ブ]リユー， ダブ[リユー]シー

B型：[エー， エーティーエ]ム；[ピー， ピーティー]エー

語頭要素のアクセント型を継承するというのは、この方言の複合語アクセント規則——いわゆる複合法則（平山 1951）——であり、まさに複合名詞の韻律特徴である。つまり、FBIやPTAなどのア頭文字語のアクセントは、下記の「夏休み」や「春休み」と同じように、複合語のアクセント規則で説明できる。

A型：[な]つ（夏）， なつや[す]み（夏休み）；[ふ]ゆ（冬）， ふゆや[す]み（冬休み）

B型：は[る]（春）， はるやす[み]（春休み）；あ[き]（秋）， あきやす[み]（秋休み）

ちなみに鹿児島方言のア頭文字語アクセントは、この方言の外来語アクセント規則や電話番号のアクセント規則では説明できない。このことから、この方言のア頭文字語は複合語アクセント規則によって処理されていることがほぼ確定できる。

一つの方言の分析が確定すると、他の方言の分析も一歩進む。たとえば複数の解釈が可能であった甌島方言のア頭文字語アクセントも、複合語アクセント規則（鹿児島方言と同様の複合法則）で説明できる。この方言のア頭文字語はすべてA型アクセントで発音されるが、これはアルファベットがすべてA型で発音されることに起因する。

[エ]フ， [エ]フ[エ]ス， [エフ]ビー[ア]イ

[エー]ー， [エー]ティー[エ]ム， [エーエ]ス[エ]ル

甌島方言と鹿児島方言の違いは、アルファベットが単独で発音された場合にすべてA型となるか（甌島方言）、A型とB型に分かれるか（鹿児島方言）という違いであり、語頭要素のアクセント型を継承するという点では何ら違いはない。同じ内容の複合語アクセント規則（複合法則）を用いながらも、個々のアルファベットのアクセント（入力構造）が異なるために、方言差が生じているのである。

これに対し、東京方言・近畿方言と鹿児島方言・甌島方言との違いは、複合語アクセント規則の中身が異なることによって生じる。前2方言の複合語アクセント規則は鹿児島や甌島

の規則とは根本的に異なり、最終要素の音韻構造によって決まる。とりわけ最終要素のアクセント核を保持しようとする力が強く働くのが特徴的である (Kubozono 1995, 1997)。複合語アクセント規則をこのように見ると、東京、近畿2方言のア頭文字語アクセントもまた複合名詞のアクセント規則で説明できるようになる。たとえばJR (ジェーア<sup>1</sup>ール) やPTA (ピーティーエ<sup>1</sup>ー), BBC (ビービーシ<sup>1</sup>ー) のアクセントは「10・ア<sup>1</sup>ール」や「カフェ・バ<sup>1</sup>ー」, 「ディズニー・シ<sup>1</sup>ー」などの複合名詞のアクセント型と同一であり、後者と同じ規則で説明できる。

ジェ<sup>1</sup>ー + ア<sup>1</sup>ール → ジェーア<sup>1</sup>ール (JR)  
 ジュ<sup>1</sup>ー + ア<sup>1</sup>ール → ジューア<sup>1</sup>ール (10 アール)  
 ビ<sup>1</sup>ー + ビ<sup>1</sup>ー + シ<sup>1</sup>ー → ビービーシ<sup>1</sup>ー (BBC)  
 デイ<sup>1</sup>ズニー + シ<sup>1</sup>ー → ディズニーシ<sup>1</sup>ー

鹿児島方言や甕島方言との違いは複合語アクセント規則の中身に起因するものであり、体系ごとの複合語アクセント規則によってア頭文字語のアクセントが説明できるという点では変わらない。また、東京方言や近畿方言では語全体が平板化する（つまりアクセント核が失われる）ア頭文字語も観察されるが、これは当該方言独自の平板化規則 (Kubozono 1996, 窪菌 2006) に起因するものであり、「ア頭文字語のアクセントが当該方言の複合語アクセント規則によって決定される」という通方言的な一般化を妨げるものではない。

以上述べてきた分析は今後さらに発展させる可能性と必要性を秘めている。たとえば、この複合語アクセント説が上記4方言以外の日本語方言にもあてはまるかどうか確認する必要がある。また英語やドイツ語などのア頭文字語 (FÁ, PTÁ) が複合語 (たとえば blackboard (黒板), greenhouse (温室)) ではなく、句構造 (black board (黒い板), green house (緑の家)) と同じ音韻構造を持つという事実も注目に値する。同じア頭文字語でも言語によってこのように処理の方法が異なるという事実は大変興味深く、今後さらに通言語的視点や音韻理論の観点から検討してみる価値がある。

## 参 照 文 献

- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』東京：学界之指針社。  
 Kubozono, Haruo (1995) Constraint interaction in Japanese phonology: Evidence from compound accent. *Phonology at Santa Cruz (PASC)* 4: 21–38. University of California at Santa Cruz.  
 Kubozono, Haruo (1996) Syllable and accent in Japanese: Evidence from loanword accentuation. 『音声学会会報』211: 71–82. 日本音声学会。  
 Kubozono, Haruo (1997) Lexical markedness and variation: A nonderivational account of Japanese compound accent. *Proceedings of The West Coast Conference on Formal Linguistics* 15: 273–287. CSLI, Stanford.  
 Kubozono, Haruo (2003) Accent of alphabetic acronyms in Tokyo Japanese. In: Takeru Honma, Masao Okazaki, Toshiyuki Tabata and Shin-ichi Tanaka (eds.) *A new century of phonology and phonological theory*, 356–370. Tokyo: Kaitakusha.  
 窪菌晴夫 (2006) 『アクセントの法則』(岩波科学ライブラリー 118) 東京：岩波書店。

窪 園 晴 夫

窪 園 晴 夫 (くぼ ぞの ・ はるお)

国立国語研究所理論・構造研究系教授。Ph.D. (言語学) (エジンバラ大学)。南山大学助教授，大阪外国語大学助教授，神戸大学教授を経て，2010年4月より現職。

主な著書・論文：*The organization of Japanese prosody* (くろしお出版，1993)，『語形成と音韻構造』(くろしお出版，1995)，『アクセントの法則』(岩波科学ライブラリー118，岩波書店，2006)，*Japanese Accent. (The Oxford handbook of Japanese linguistics. Oxford University Press, 2008)*，*Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese. (Lingua 120, 2010)*。

受賞：市河賞 (財団法人語学教育研究所，1995)，金田一京助博士記念賞 (金田一京助博士記念会，1997)。

社会活動：日本言語学会編集委員長・評議員，日本音声学会評議員。